

年間第2 1 主日

第一朗読 イザヤ 66・18-21
第二朗読 ヘブライ 12・5-7、11-13
福音朗読 ルカ 13・22-30

2025.8.24 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
銚子教会主任司祭 渡邊泰男神父

今日のイエス様の神の国に入る救いについてのお話、なかなか厳しいことをおっしゃっております。わたしたちがこの宴会に呼ばれているか否か。全て呼ばれているのですが、不義を行う者——いや、日本人で不義を行う者は皆無と言っていいでしょう。しかし、わたしたちはそれ以上に、あのキリシタンの血を受け継ぐ日本人?!として——、それでは証しにならないのかもしれないかもしれません。

わたしたちは、主によって助けられ、主キリストによって、主キリストを通して、天の父のもとに招かれています。日々の生活の中、見える世界の中で、わたしたちは十字架を日々担い、あるいは受難の茨を被りながらも、いつでも新しさの中に招かれ、ささやかな回心かもしれません。が、その回心（気付き）によって、わたしたちは再生されます。言い方を変えれば、それこそ、復活（再生；少しずつ新しさへいく）への道を歩むのです。その時は、非常に、大変かもしれません。このようなことが、日常の中で積み重ねているはずですが、ただ、それが、だんだんと歳をとると気付かずに、覚えてなかったりするんです。

でも、わたしたちはキリストの弟子として、キリスト者として、受難と十字架に向かう日々の生活を通して永遠のいのちに招かれています。このことは、前フランシスコ教皇がおっしゃったように、教会（キリストの体）がシノドスとしているのです。いつも、主キリストが——意識しようと、しないと、共に歩んでおられる（シノドス）のです。だから、主が共に支えてくださっておられるので、わたしたちは日々の生活の中で「しよえない十字架」は与えられないのです。それを担い歩むことによって、わたしたちは再生（復活）され、いつでも新しさの中に招かれていくのです。つまり、新生されていくのです。

ところが、歳をとると頑固になって——堅信の儀には堅く信じると書きますが——、真理が逆説（パラドックス）のように、「老いては子に従え」。

我を捨て、無限のわたし（何かにこだるわたしではなく）ではなく、「イエスか、はいか、喜んで」モットーに、主のもとに招かれていること（日常の出会い・機会）を、キリストの道（受難・十字架と復活への道）をしっかりと歩んで行きましょう。

「そこでは、後^{あと}の人で先になる者があり、先の人で後^{あと}になる者もある」（ルカ 13・30）。つまり、わたしたちの考えているこの三次元の時空を超えるんです。その素晴らしさの中にわたしたちは招かれ、この日常をキリストの道としてしっかりと、パウロのように忍耐し、歩いて行きたいものです。

今日のわたしたちは、ここで主の遺言のミサを捧げます。いろいろなご事情でこの共同体に足を運ぶことができなくなっている先達^{せんだつ}の方々のためにも、ご一緒にこのミサ聖祭を捧げてまいりましょう。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>